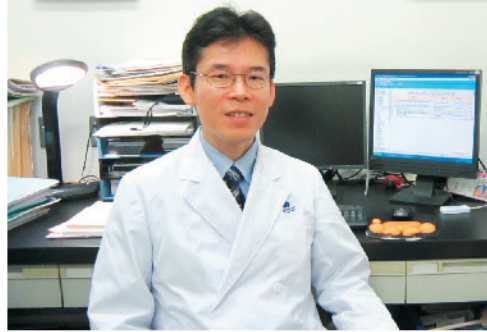


線溶系を中心とした細胞機能制御メカニズムの研究 生物資源科・関泰一 准教授

高血圧に肥満、糖尿病の固まり(血栓)がうまくいった生活習慣病に溶けなくなる。そのた



研究室で資料に囲まれる関准教授

が、ポイントが疾病予防の特効薬を食品自体が含む栄養成分の中に追求する姿勢にある。食品内

肝臓の再生機構を解明 食品を分子レベルから見据え ニンニクの抗がん作用物質の仕組みも

肝臓といえは、栄養素も約1週間で元の大きさに戻る再生する臓器として知られている。

今回の発見は、線溶系の酵素が肝臓の細胞膜表面にある特定のタンパク質のリジンというアミノ酸を切断することによって肝再生を調節すること



実験室での学生の指導にも熱が入る

意あふれる研究陣だ。その目配りが、とりわけ力を入れているのがプレゼンテーション。週最低一回

関泰一(せき・現職。専門は栄養生化学) 昭和59年、応用分子細胞生物学、応用生化学、応用生化学、日本農芸化学会(編集委員) 日本

ウンベロプロシス菌の分布を遺伝子レベルで解析 薬・小川吉夫教授

アオカビの生成物からウンベロプロシス菌は極地帯でみよ」となった。抗生物質ペニシリンが

アオカビの生成物からウンベロプロシス菌は極地帯でみよ」となった。抗生物質ペニシリンが



研究室で机に向かう小川教授

種分化の機構 地域で異なる遺伝子塩基配列を究明

道(から石垣島(沖縄県)まで、これがいわば体の道(から石垣島(沖縄県)まで、これがいわば体の



実験室で研究室の学生に囲まれる小川教授

「カビのように小さくて軽い胞子を散布して子孫を残していく生きものでも、地域ごとに異なる

新薬の手がかりも ウンベロプロシス菌の研究は気温に制約を受けて

「RPPB2」に着目 遺伝子はデオキシリボ核酸(DNA)でできて

となり、明瞭(めいりょう)な結論を出すことが難しかった。そこで、タ

小川 吉夫(おがわ) 学部教授。専門は菌類学(よしお) 昭和47年